Dec 4, 2013「メルロ＝ポンティと身体論」8
Tommy Dorairo

Tommy Dorairo (hr5x6kgg): ログを読んできたのですが、どう始めたらわかりやすいのか、決められなかったので、また最初から始めてみます。
Yan Lauria: ちゃんとワインも用意したし、万全^^
Almond Andel: お。のみのみですか？
Yan Lauria:（今日は脱線させないように気をつけよう）
Almond Andel:（ばんからでよろしいかと）
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 脱線というか、お考えを聞くのは、楽しいし、考えさせられるので、むしろどうぞお願いします。

メルロ＝ポンティが身体論をつくり上げる時に依拠したゲシュタルトですが、その理論の、メルロ＝ポンティにとってのポイントは、私たちの知覚経験は、感覚刺激の総和ではなく、要素に還元できない、あるまとまりとして成立している、というところにあります。また、そのまとまりが、図ー地として構造化されている、つまりバラバラの刺激ではないという点もメルロ＝ポンティにとって重要でした。

メルロ＝ポンティによれば、ゲシュタルト心理学に先立つ、古典的な心理学は、「客観的世界」を前提としています。「客観的世界」というのは、目の前に物理的に広がっているとされる世界のことです。こうした世界があることを、通常の私たちはあまり疑いません。

しかし、メルロ＝ポンティによれば、「客観的世界」を前提とした上で、知覚を考えると古典的心理学のいう知覚論になってしまう。そこでは、知覚とは「客観的世界」の中にある物理的刺激によって、私たちの意識に引き起こされるものだと考えられています。
Yan Lauria: うんうん
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): メルロ＝ポンティは、こうした構図を疑ってみせます。
メルロ＝ポンティは、たとえば、カニッツァの三角形のような図形を想定します。
Yan Lauria: あ、なるほど
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): ご存じなければ、ご面倒ですが、検索してみてください。
はるか (haruka.mcmahon): http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%8B%E3%83%83%E3%83%84%E3%82%A1%E3%81%AE%E4%B8%89%E8%A7%92%E5%BD%A2 これですね
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はいそうです。
私たちは、そこに物理的にはあるはずのない三角形を見ます。ウィキの説明にあるように、白い三角形です。
Yan Lauria: けっこう、くっきりと見える
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はい。結構見えるものです。
客観的世界の中には刺激が見つからないのに、私たちは三角形を知覚します。
では、これはなぜ起こるのか。

古典的な通常の説明ならば、現に与えられている感覚を結び合わせ、そこから白い三角形を作り出しているのは、主体の能力なのだということになります。
Yan Lauria: ハンドウイルカもこの透明視ができるんだって
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): イルカですか？
Yan Lauria: そそ
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): へえ。初めて聞きました
Yan Lauria: 今、机の上にあった本に書いてあった^^;
はるか (haruka.mcmahon): へえー
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): ありがとうございます^^
Almond Andel: いるかにもゲシュタルトがある…
Yan Lauria:「イルカは地上の夢を見るか」村上　司。ブルーバックス
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 理系の方の本でしょうか？

はるか (haruka.mcmahon): http://bookclub.kodansha.co.jp/bc2_bc/search_view.jsp?b=2578263
これかな
Yan Lauria: これこれ^^イルカとのコミュニケーションに挑戦した本で、この講座の内容とよくつながってる
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): へえ。知りませんでした。最近の本なんですね。今度借りてみます。
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 錯視などを例にして、知覚の成立において、主体の能力を中心的なものとする考えを、メルロ＝ポンティは主知主義的知覚論と呼びます。カニッツアの三角形でいえば、黒いパックマンを関係付け、そこに白い三角形があると判断するのは、私の能力であると、そういうことになります。

これに対して、メルロ＝ポンティはミューラー＝リアーの錯視を反証とします。
Amari Blackburn: ノ
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はい。どうぞ
Amari Blackburn: 無意識に判断している、ということでしょうか
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 意識的か、無意識的か、についてはメルロ＝ポンティは言及していません。彼にとっては「判断」ということがポイントになります。
Amari Blackburn: 経験に基づく、ということかな。でも、それだとイルカは判別できなさそうな
Yan Lauria: 脳が視覚情報を処理した結果、三角形に見えるというのは、意外にそうかもと思う。
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): メルロ＝ポンティは、やや不当なくらいに「判断」を警戒しています。というのも、メルロ＝ポンティにとって「判断」作用に重点をおくことは、デカルトに戻ることであり、それはひいては、身体を機械論的に取り扱うことにつながるからです。この意味で、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の中で、彼が乗り越えたい二元論に絡め取られている点が多く見受けられます。

すみません、さきほどの疑問に答えたことになっているでしょうか？ 不明であればもう一度お願いします
Amari Blackburn: ええ、大丈夫・・・かな。身体を機械論というあたりがややきになります
Yan Lauria: 三角形という言葉を知っていないと三角形を認識できない、というわけではないんですよね？
Amari Blackburn: あ、それそれ
はるか (haruka.mcmahon): おお、それは気になるなあ
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はい。ことばというか、概念の問題にはメルロ＝ポンティは還元しないようです。
Yan Lauria: それで安心した
Amari Blackburn: 三角、という名称でなくても△を認識するということかな
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はい。どちらかというと、メルロ＝ポンティにとってことばは使用から生まれたものです。彼はそう考えたいようです。
Yan Lauria: それは賛成。あとで言葉を発明しないと言い表せない時って、しょっちゅうある。
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 認知言語学の、用法基盤言語論の先駆けとかんがえる事ができると思っています。
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 続けます。
カニッツアの三角形でいえば、黒いパックマンを関係付け、そこに白い三角形があると判断するのは、私の能力であると、そう考える主知主義的な知覚論に対して、メルロ＝ポンティはミューラー＝リアーの錯視を反証とします。

ミューラー＝リアーの錯視は、山かっこをつけることで、同じ長さの線分が、違った長さの線分に見えるという錯視です。
Yan Lauria: なるほど。主知主義の欠陥、ってわけだ
はるか (haruka.mcmahon): http://www.geocities.jp/sakushiart/sasi/85_1a.JPG これですね
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はい。欠陥です。画像をありがとうございます。メルロ＝ポンティは、もし知覚が諸刺激＋判断で成立しているならば、ミューラー＝リアーの錯視は行らない、すくなくとも同一の長さとして判断できるといいます。

このメルロ＝ポンティの反証は、みなさんは納得されるでしょうか？
Almond Andel: ですね

Yan Lauria: 脳は視覚情報を処理してるけれど、それは主知的ではなく、ある種、受動的に処理してると思う。受動的だから、騙されもする
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 現在と同じ脳科学の成果がメルロ＝ポンティの時代にあったら、また違ったのかもしれません。
Yan Lauria: 脳は用法基盤的、使用依拠的に処理してると思う。
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): なるほど。その考えにたつと、ミューラー＝リアーの錯視が起こるのは、どういうことになるでしょうか？
Yan Lauria: お、そっか、より受動的、の方がいいのかな
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): より受動的というのは、どういうことになりますか？
Yan Lauria: 用法基盤的、使用依拠的に学習するんだけど、同じだと学習してないから、間違ってしまうとか。この錯視が間違いであることを何度も学んでいれば、同じ長さに見えるようになるかも
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): ミューラー＝リアーの錯視は、間違いだとわかっていても、同じ長さに知覚するのは難しいように思います。その錯視を同じ線分で見るためには、山カッコを隠すか、定規をそれぞれに当てるか、が方法かなと思います。未だに私はそのままでは同じ長さにみえません。
Yan Lauria: 確かに、目で定規を当てる的な処理をしないと、見抜けない
Almond Andel: 遠近法との兼ね合いで、錯視を生じたほうが、正確に同じ長さを捉えるより、有利？
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): なるほど、andelさんのいう有利というのは生きる上でというような意味でしょうか？
Almond Andel: そういう類のもの、という説明もひとつあると思います
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): なるほど。andelさんのはアフォーダンスのような考え方に近いのかもしれません。
Yan Lauria: 錯視が利点である、という例としては立体を平面に書いて立体に見えるというのは、確かに利点かも
はるか (haruka.mcmahon): この錯視は、どの文化圏のどの人種でも同じように起こるんですよね
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 錯視に文化的差異があるとは確かにあまり聞きませんが、いかがでしょうか。
Yan Lauria: 私も聞いたことがありませんね。人類共通
はるか (haruka.mcmahon): 同じように起こるんなら、人間の脳がそもそもそういう錯視を起こすように出来上がってるということになるのかな
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 同様の例を、メルロ＝ポンティは水平線近くの月と、天頂付近の月で出しています。水平線近くの月は大きく見え、天頂付近の月は小さく見えます。同じ大きさだとは思えません。同じ大きさだと確認するには、紙や手を丸めて、そこから月を覗きこむしかない。

ミューラー＝リアーの錯視を反証として、メルロ＝ポンティは判断が知覚を作り出すことを批判します。そして、また、カニッツアの錯視を例として、物理的刺激によって知覚は作り出されているという考え方も批判します。
Yan Lauria: おお、面白い
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): それらはメルロ＝ポンティにとって、双方ともに、「客観的世界」を前提として、そこから知覚を考えている理論だということになります。
Yan Lauria: ほー
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): 客観的世界を前提とすれば、ミューラー＝リアーの線分は、違った長さであってはならない。またカニッツアの錯視における、白い三角形はあってはならない。だから、それらは「錯覚」と呼ばれる。

しかし、私たちの知覚現象そのものにつき従えば、白い三角形は見えるし、線分は違った長さだし、水平線上の月と、天頂の月は、違う大きさの月と私たちは感じるわけです。それを「錯覚」、あるいは「主観的見方」とするのは、客観的世界が前提とされているからです。

メルロ＝ポンティは素朴に「客観的世界」を前提として知覚を考えるのではなく、私たちが現に経験している知覚経験に立ち戻って知覚を考えなければならないとするわけです。

現に経験している知覚経験を記述するのに、最適なのは「図－地」であるとメルロ＝ポンティは言います。私たちのもっとも原初的な知覚は、「地」の上の「図」として与えられているというのがメルロ＝ポンティの考えです。
Yan Lauria: 図－地をメンタル・マッピングって言い代えてもいいのかな？
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): メンタル・マッピングというのはどういうものでしょうか？
Yan Lauria: 視覚障害者は、耳で聞いた言葉を、頭の中で並べるというか、構造化することで内容が理解できる。それが間に合わないと、理解できない。膨大な文字情報を音声発生させて聞いても理解が追いつかない。目が見える人は文字情報が紙の上に配置されてるから、理解が早い。それがメンタル・マッピング
はるか (haruka.mcmahon): へー
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): なるほど。ちょっと考えさせてください
Almond Andel: 時間ですね。線分の違いや、三角の錯覚が、どう、地と図で説明できるのか、知りたいところなんですが、また、次回（来年！）ですか
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): あ、そうですね
Almond Andel: 皆さん、質問があれば
Yan Lauria: 地というのは、ホワイトボード、と思えばいいんですよね？
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): はい。図は常に地とセットです。
Almond Andel: 地がなければ図が成り立たない。逆もそうですね
comet Morigi: 吉原治良の円が、図と地に分化しない。この件がずっと気になっていたので、何かの機会に、ここかもしれないし、私の講座かも知れないし、まとめて話したいところです。
Yan Lauria: へー
comet Morigi: これは、本物を見たほうが、分かりやすいです。地が変われば、図は変容します。
Amari Blackburn: 「紙」がない民族だと、どうなるんでしょうね
Almond Andel: もうちょっと、メタなレベルかなあ
comet Morigi: この画像ね。何度も出してますが。http://kirajapan.blogspot.jp/2012/09/2011911-comet-morigi-6.html
Yan Lauria: ピタゴラスだったか、地面に書いて考えてたし。洞窟絵画ってのもあるから
comet Morigi: 図と地が入れ替わるのではなく、図・地を分けようにも、どっちが図なのか、決められない。
Almond Andel: 知と図、来年また、新しい気持ちで確認して行きましょうね。感性の属性ですよ、地と図＞Yanさん
comet Morigi: https://docs.google.com/document/d/154HWigpJPBdPw5fZWopxFCsp_at7FVUkdKk2ZrXIqVs/pub
Yan Lauria: 「情報の構造化」で、この地と図に似たことが言われるんだけど、ちょっと意味合いが違うのかな？
Yan Lauria: （ああ、分かった。「地と図」）
Mog (mogura.yokosuka): 図は私の遠近法で色づいて見える気がするなあ。どうしても避けられない形で図が迫って来てしまう時はあるけど
Almond Andel: だいたい、よろしいでしょうか？来年、またよろしくお願いします。それでは、Tommyさん、今日はありがとうございました
はるか (haruka.mcmahon): ありがとうございました
Tommy Dorairo (hr5x6kgg): どうもありがとうございました。
Almond Andel: おやすみなさい
Mog (mogura.yokosuka): ありがとうございました
Mog (mogura.yokosuka): おやすみなさい